

社会科地域学習副読本「わたしたちのまちマナウス」の作成

前マナウス日本人学校 校長

愛知県名古屋市立東海小学校 校長 中西 雅 道

キーワード：現地理解，総合的な学習，ワークブック

1 はじめに

「小学校3・4年生を対象とした社会科副読本をつくりたいといった願いのもと、これまであった私たちのマナウス市を参考にして作成しました。平成3年当時と比べ、マナウス市は大きく成長しました。15年の間にマナウスは大きな変貌を遂げました。もちろん、まだまだこれから大きく変わっていくことでしょう。今回の改訂によって、これから何年かの間は授業や学習に大いに役立つものと思います。日本では、来年度より新しい学習指導要領が試行、23年度には本格実施されます。これに対しても対応できるよう工夫してつくりました。マナウス日本人学校に学ぶ子どもたちが、マナウス市について知ったり日本と比べて考えたりして、社会的事象の意味を追究する上で役立てば編集委員一同大きな喜びであります。最後に副読本作成にあたり資料提供にご協力いただきました多くの皆様方に心より感謝申し上げます」これは、平成20年度につくった社会科地域学習副読本「わたしたちのまちマナウス」の編集後記として私が書いた文章である。

平成19年度、私はブラジルのマナウス日本人学校に赴任した。この年は、ブラジル移住100周年という歴史的な年であった。そして、翌20年度「わたしたちのまちマナウス」を刊行した年は、アマゾン移住80周年というタイムリーなときであった。

マナウス日本人学校に通う子どもたちに、現在住んでいるマナウス市のことを知らせたいといった思いが赴任当初から強くあった。しかるに、危険な治安等の関係上、小学3年生の社会科で学校の周りを見学するときも、学校の公用車にガルダー（警備員）を同乗させての車上見学にとどまるなど制約があった。こうした危険な地域実態といったハンディを乗り越えながらも、何とかマナウスのまちの様子を知らせたい、マナウスに暮らす人々の生活の知恵・社会のしくみをとらえさせたいと考え、歴史上タイムリーなこの時期に社会科副読本の作成について取り組んだ。



2 作成の実際

(1) 作成にあたってふまえておいたこと

社会科副読本を作成したい、とはいうものの、作成年度が普段の年度以上に教員の過重負担をもたらすものであってはならないと考えていた。日ごろから、マナウス日本人学校の教員は、子どもたちのために労力を惜しまず日々の授業に打ち込んでいた。また、自分たちの力量を上げるための研修も重ねていた。

私は、労力を惜しまない教員の資質をしっかりと受け止めた上で、社会科副読本を作成する平成20年度に限って研修の時間を社会科副読本の作成にあてたいと考えた。こうした考えのもと、19年度後半から「来年度は副読本をつくりたい。ただし、先生方の仕事は増やさない」と公言してきた。

いよいよ副読本を作成する20年度を迎えた。4月、今年の研修計画を提案する際、副読本作成の計画案を示した。新たな仕事はつくらないと言ってきたゆえ、教員にさほど不安な様子はみられなかった。とはいっても、どんな計画だろう？、はたしてうまくできるのだろうか？などなど、やや心配な様子はうかがえた。

私は、示した。計画案として、具体的な①「目次の柱立て」、②「各ページのわりつけについて」…。②については、5月末までに各ページ細案を私の方で用意するといったように。

具体的な方向性が指し示されたため、職員は安心して受け入れ、さらに建設的な意見「新学習指導要領にも対応できるように」など、前向きな姿勢でもってこたえてくれた。

ふまえておいたこと

- 教員の新たな負担を増やさない。
- 方向性は、校長が指し示す。
 - ・目次の柱立てについて
 - ・各ページのわりつけの細案について

(2) 目次の柱立て

大きな柱5，小さな柱13，トピック1として構成した。

<大きな柱> 1わたしたちのまち，2人々のしごととわたしたちのくらし，3くらしをまもる，
4住みよいくらしをつくる，5アマゾンを開いた人々

<小さな柱> 1 (1)学校のまわりのようす，(2)マナウス市のようす
2 (1)日系農家のしごと，(2)オートバイ工場ではたらく人，(3)スーパーマーケットではたらく人
3 (1)しょうぼうしょではたらく人，(2)けいさつしょではたらく人，(3)総領事館ではたらく人
4 (1)せいそうきょくではたらく人，(2)じょう水場ではたらく人，
(3)西部アマゾン日伯協会ではたらく人
5 (1)アマゾナス州に移住した人々，(2)マナウスに移住した人々

<新学習指導要領対応のトピック> マナウスの電力供給

(3) 各ページのわりつけの細案

もくじ
1わたしたちのまち
(1)学校のまわり
(2)市のようす
2人びとのしごとと

- 1 -

学校のまわりのようす
※ 学校の写真

※ 学校の見取図

- 2 -

学校のまわりのようす
北

西 ※方位の写真 東

南
- 3 -

まずは、このようにすべてにわたって60ページまで、アウトラインをわりつけていった。
そして、次に各ページに対して、細案をわりつけていった。
一例として、2 (2) オートバイ工場ではたらく人の17ページの細案は以下のようである。

オートバイ工場ではたらく人

<関連工場>

オートバイのほとんどは、マナウスの工場で作られています。もともになる材料は、日本やサンパウロから多く送られてきますが、かぎやブレーキ、クッションなどの多くの部品がマナウスにある関連工場で作られます。

このように、オートバイ工場は、日系のたかさんの関連工場といっしょになってオートバイをつくっているのです。

※ ホンダロック、ニッシンブレーキなど関連工場数社の様子を写真におさめる。

* 次ページに、この17ページを参照して実際に職員が資料集として完成させたページが写真にて掲載されている。

- 17 -

このように、すべてのページにわたって担当した者が戸惑わないように、そこでの具体的掲載文、掲載する写真など資料の視点をプロットした。

こうした細案を6月初めに職員に示した。職員は、先の見通しをもって、安心して取り組める資料集作りに意を強くしていった。

(4) 作成の様子

いよいよ作成段階に入る目途がついた。あとは、各ページの執筆担当を決めるだけとなった。ここで大切なことは、私の方で割り振りをしないことであった。やらされているといった感じを除去し、自分たちがつくっていると

いう意気込みをもって執筆にあたってもらいたかった。教務主任と資料集担当者（20年度の研究推進者）に執筆箇所については、すべて一任した。期待通り、二人はみなのやる気を引き出すよう、各人にふさわしい分担箇所をうまく割り当てていった。

ここまでくれば、もう安心である。能力の高い派遣教員一人一人は自分のペースで割り当てられた原稿を消化していった。もちろん、取材に出掛ける時間の確保（授業後の研修時間の割り当て）、取材に出掛ける際の紹介状なども、こちらで予め用意しておいた。職員は、自分の執筆箇所を精力的に取材し、忙しい校務の合間を縫って原稿を完成していった。

3 おわりに

6月に資料集の細案が出そろった段階で、教務主任が、「校長先生、この資料集、マナウス日本人学校の取り組みも広報できるし、財団の補助を申請してみようと思います」と言った。「それはいい、ぜひ応募しよう」と応答し、夏明け財団より決定通知（資料集作成費8万円）をいただいた。その旨、運営委員会にも報告し、年度末には完成した資料集を各運営委員にも配付した。資料集は、全部で100部作成し、職員・全児童生徒・資料提供者そして運営委員に配付した。あと5年ほど先までの転入生分が現在保管されているといった状態である。

資料集が完成した翌年、平成21年度からはこれまでのように年間取り組む研究テーマが設定され授業研究が行われている。こうして資料集づくりに取り組んだ20年度は過ぎた。

私は、この社会科地域学習副読本「わたしたちのマナウス」の作成を通じて多くのことを学んだ。もちろん、第一は子どもたちのために学習で役立つということである。そのために資料集をつくった。まずは、これに尽きる。次は、ブラジル移住100周年の翌年、アマゾン移住80周年の年というタイムリーさである。時期をのがさない。そして、最後に学んだことは、いいことだからやろうではなく、やれるだけの状況を創出することの大切さである。「職員に新たな負担をかけない、職員のやれるという見通しは校長が責任をもって立てる」こうした環境整備をきちんとしたうえで取り組むことが成功の秘訣であり、職員からの賛同も得られる。

社会科地域学習副読本「わたしたちのまちマナウス」の作成が、マナウス日本人学校に通う子どもたちにとって、マナウス市の理解に役立つとともに、ひいては国際理解・多文化共生につながる一助となれば、これに勝る喜びはない。

